

誠にすばらしく貴重な本が出版されたものである。近年、大腸に関してはさまざまな名著が著されたが、早期大腸癌の各型をこれほど見事に、無駄なく、かつ詳細に提示してある成書は他に類をみない。

通常内視鏡所見、拡大内視鏡所見と病理組織所見が、各症例 10 枚前後の美しい写真で見開き 2 頁にまとめられている。通常内視鏡観察時の診断の要点も記載されており、読者はまず、通常内視鏡所見から各病変の深達度を推定してみるとよい。次に、拡大内視鏡所見を加味して深達度診断を考える。著者らの提唱する invasive pattern と non-invasive pattern の違いがここでよく理解できるであろう。最後に、標本の組織所見と比較することによって、通常内視鏡診断と拡大内視鏡診断における自らの正診度を比較することができる。著者らの分析によれば、invasive pattern を示す病変で sm 癌は 94.7 %、non-invasive pattern では腺腫・m 癌が 98.4 %であり、感度・特異度とも申し分がない。数ある分類の中でも、著者らの拡大内視鏡の臨床分類は最も実用的であり、今後、一般に広く利用されることであろう。

初心者は、本書を上述の手順に従って一例一例熟読玩味すれば、熟練者の域に達するはずであるが、別の利用法もある。本書に記述されている hardness, deformity, chicken skin mucosa, depressed area, fold convergency, expanded change, などの副所見に基づけば、通常内視鏡観察で計算上 90 %が正診されている。本書には拡大内視鏡に慣れていない内視鏡医が、早期大腸癌の深達度を正しく診断するためのきわめて重要な情報が満載されているのである。これはかつてどの成書に

もこれほど明確に記載されてはおらず、本書の大きな特色をなしている。拡大内視鏡使用の有無にかかわらず、本書はきわめて有益な成書となりうるのである。本書の通常内視鏡観察で物足りなくなれば、本書でさらに拡大内視鏡の活用法を学ぶことができる。診断・分類に関する基本事項と、各症例ごとの comment として診断に関する説明が簡潔な日本語である以外は、英語の単語による記述のみなのでこのまま欧米でも利用可能である。誠に賢いと感じた。

本書は国立がんセンター中央病院、東病院の内視鏡部が総力をあげて作成しただけあって、よくぞこれだけ貴重な症例を集めたと驚嘆せざるをえない。一例一例の写真が芸術品に等しく、難しいことを考えずにただ眺めているだけで楽しくなってくる。組織所見の写真も内視鏡のそれに劣らず質が高く、大変説得力があって本書の内容を引き締めている。表などの無用なデータをほとんど載せず、症例提示に焦点を絞ったことも本書の成功の一因であろう。

すばらしいの一語に尽きるなかで、唯一、気になる所は、偽浸潤が sm 2 と診断されていることである (case 7)。治療法選択に関係するだけに、本書の影響力を考慮して失礼を承知であえて指摘したが、これは組織診断の問題であって、内視鏡所見が中心である本書の価値をいささかも減ずるものではない。

本書は、早期大腸癌診断をめざすすべての内視鏡医にとってバイブルともいえるべき名著であり、この分野のすべての人々の必見の書として推薦したい。

(B5判 296頁 定価18,900円(本体18,000円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)